

草のみどり

Kusa no Midori

FRONTLINE | 文学部

社会で活躍する文学部生の力





FACULTY OF GLOBAL MANAGEMENT

世界を人に動かす Vol. 32

企業経営とグローバル経済の先端知識、優れたコミュニケーション能力を養うべく、国際経営学部生は前進を続けています。

留学を決心したのは 高校時代から

高校生の頃から、海外の大学に留学して多くの文化・価値観を持つ人々と接することで新たな学びを得たいと考えていました。英語が最も得意な学科で、自分の得意分野をさらに磨くべく留学プログラムがある専門学校に進学をしました。「何事も、やるならとにかく最後まで」をモットーに生きてき



留学で学んだのは、 言葉以上のもの

国際経営学部国際経営学科4年
神奈川県立厚木高等学校出身

香西 優奈

た私ですが、そんな私でも一度だけ夢を諦めそうになったことがあります。なんとコロナ禍により留学プログラム自体が中止になってしまったのです。

どうしても留学を諦めきれず、交換留学の制度が充実している大学への進学を志しました。最終的に、現在所属している本学の国際経営学部へ合格。英語を使って幅広く経済学や経営学を学べる環境に身を置くとともに、昨年8月から大学の交換留学の制度を使ってカナダの大学へ1セメスター留学をしました。

留学前の準備期間

留学準備として、語学試験の対策はもちろん、これまで以上に真剣な思いで学部の授業に出席しました。国際経営学部はほとんどの授業で英語が使用されているので、現地の大学と遜色のない授業を受けることができます。日本で

の授業にも真摯に向き合うことで、向こうで振り落とされたり学びのギャップを感じたりしないよう準備を重ねました。準備期間にしっかりと取り組んだおかげか、民間企業財団の奨学金をいただくことができ、自信を持って留学に臨めました。

ついにカナダへ向けて出発

出発当日は、「いよいよ夢だった留学が始まるんだ」という期待感で胸が高鳴り、ワクワクと興奮でいっぱいでした。けれど、いざ出発の直前になると、家族や友達と数カ月間離れるという寂しさに押しつぶされそうになりま



滞在中に奇跡的に目撃したオーロラ



留学中に会った友人たちからの寄せ書き



誕生日を友人たちに祝ってもらいました

した。「あんなに準備してきたけれど、本当に足りないものはないのか?」「カナダでうまくやっていけるのか?」。今まで感じたことのなかった不安が一気に押し寄せてきました。それでも、カナダに到着して大学の寮に入るとすぐに友達ができ、その不安はすっかり吹き飛びました。世界のどこにいても、やはり一番の支えになるのは、友達との存在。だと実感しました。

カナダで出会った、 かけがえのない友人たち

入寮して数日後には大学の授業が始まりました。慌ただしい毎日でしたが、たくさんの方から来た多くの人々と友達になり充実した時間を過ごしていました。授業が始まって2週間も経たない頃に迎えた誕生日、友達がサブラ



グループメンバー。「せっかく日本から来たんだから」とさまざまな場所に車で連れて行ってくれました



“アメリカ大陸で一番早く朝日が昇る場所”で友人たちと日の出を見ました

多く、毎日が驚きと発見の連続でした。さまざまな違いを知り、自分の価値観をより深く見つめ直すきっかけにもなりましたし、「私はこういう人間なんだ」と自信を持てるよう

事前の準備と国際経営学部での授業のおかげか、留学先での授業も心配なく参加できていました。留学した大学の授業は、日本とは違って基本的に少人数で積極的に発言する学生が多く、みずから進んで参加することが必須でした。そんな周りの学生たちに刺激され、私も負けるものと予習復習に一層力を入れました。授業でも積極的に発言

カナダの大学での授業

イズでカップケーキを用意してくれていたことには本当に驚き、とてもうれしかったことを覚えています。私が留学した大学があるニューファンドランドは、日本との時差が12時間半あります。日本にいる友達とは日本時間で、現地の友達は現地時間の日付が変わるギリギリまでお祝いしてくれたので、これまでの人生で1番長い誕生日になりました。私はこの日を、一生忘れないと思います。

留学で学んだこと

し、グループワークの発表に取り組みました。グループワークでは仲の良い友人と組むのではなく、決められたグループにアサインされることが多かったです。課題に取り組みにあたり授業時間外でグループミーティングをすることが多く、おかげでプライベートでも親交を深めることができました。

国際経営学部だより

学びの集大成、もっと柔軟に！

いいだ あさこ
飯田 朝子 国際経営学部教授

国際経営学部は、2025年4月で創設7年目を迎えました。本学部では、経営学・経済学・地域研究といった専門科目を、英語を始めとする諸言語で履修し、留学生らと交流を深めながら学んでいます。

創設当初のカリキュラムでは、学部生全員が英語(もしくは母語以外の言語)を用い、5,000語以上の卒業論文を完成させることが必須となっていました。これまで第3期生までが論文を執筆・提出し、国際社会に向けて学び舎を巣立っています。とはいえ、英語で専門性のある研究論文を仕上げるのは学生に大変な時間と労力がかかります。添削するゼミの指導教員の側にも覚悟と時間が必要で、締切に間に合わない学生は卒業を諦めるケースも生じ、厳しいカリキュラム設計になっていました。

創設当初の枠組みで卒業論文を完成させるだ

けが4年間の学びの集大成と言えるのかどうか教授会では意見が出されました。時代の流れも鑑み、カリキュラム委員会などでさまざまな意見が交わされ慎重に検討した結果、新カリキュラムでは英語の卒業論文の提出は選択制とすることに決めました。つまり、卒論を書かなくても卒業できる制度になったのです。

もちろん、5,000語以上の母語以外の卒業論文は最も推奨される形です。しかし、そのほかにも日本語で書いた論文、論文形式の作品でなくても、プレゼンテーションやプロジェクト、動画作成の作品などにも評価を与え、単位化する仕組みが整いました。これらは「卒業論文」ではなく、「卒業研究」という新たな名称になります。

卒論が書けるかどうか、就職活動や留学との両立ができるか不安だった学生たちの負担を減らし、研究成果を柔軟にまとめる機会が増えました。2023年度以降に入学した新カリキュラム適用の皆さんに、「卒業研究」の選択肢をご活用いただければと思います。



卒業式では、代表学生達もガウンを着用します

にもなりました。カナダで得たこの視点は、帰国してからも日常のちよっとした場面で大きな力になってくれています。たとえば、グループワークで意見がぶつかったとき「まずは聞いてみよう」と思えるようになったのも、留学での経験があったからこそです。留学という英語力の向上が一番の目的

と思われがちですが、私にとってはそれ以上に、「人としてどう在るか」を学ぶ時間だったと感じています。勇気を出して飛び込んだからこそ得られた、かけがえのない成長でした。この経験は、私にとって一生の宝物です。そしてこれからも、新しい世界に飛び込む勇気を忘れずにいたいと思います。